

立 春 能

平成三十一年二月三日(日)

開演 十二時(正午)
開場 十一時
於 宝生能楽堂

演 目 の 解 説

12:00 シテ葛野 札 りさ

ワキ野口 能弘
" 梅村 昌弘
間 山本凜太郎

大鼓 柿原 孝則 太鼓 梶谷 英樹
小鼓 大山 容子 笛 杉 信太郎

能「金札」(きんざつ)
桓武天皇の臣下が大宮造営中の伏見に赴くと、人々に交じつて神主婆の老翁が現れ、言葉を変わらうと、天より金札が降つて来るという奇瑞が起きると、臣下が金札に書かれた文字を高らかに読み上げると、老翁は伏見の謂れを語り、天津太玉の神とは我なりと名乗って宮に入ります。金札を頭上に戴き、あらためて神の姿で現れた天津太玉の神は、弓矢で悪魔を祓い、弓弦を外して太平の御世を寿ぎます。箱庭のようなものです。

13:05 盆 山

後見 宝生 和英
辰巳大二郎
藤井 秋雅

地謡 今井 賢郎
内藤 飛能基
亀井 雄二
山内 崇生
辰巳満次郎
高橋 次郎
小倉健太郎

山本 則秀
山本 則重

狂言「盆山」(ぼんざん)
盆山をたくさん持つ有徳人にいくら頼んでも一つもくれないので、物は垣根を破り、こつそり盗みに入りません。盆山の物色しているところを見つかり、慌てて盆山の陰に隠れます。盗人が顔見知りだと気が付いた有徳人は、なぶつてやろうとします。盆山とは、盆の上に石や砂などで風景を形づくつた置物で、箱庭のようなものです。

13:30 シテ柏山 源氏供養 聡子

ワキ福王 和幸
ワキツレ村瀬 提

大鼓 亀井 洋佑
小鼓 住駒 充彦
小野寺竜一

後見 前田 親子
土屋 周子

地謡 奥家万理奈
武田 伊左
関 直美
内田 朝陽
石黒 実都
内田 芳子
久貫 弘能
広島榮里子

〓 休憩 十分 〓

能「富士太鼓」(ふじだいこ)
内裏での管弦の催しがあり、太鼓の役は浅間という楽人に決まっていたが、住吉から富士と来た人が同じ様に太鼓の役を望んで都に上つて来た。帝は浅間に殺害してしまいましたが、不安になった浅間は富士を殺害してしまいます。一方、都に上つた夫が戻らないので、妻は子を連れて都にやつて来ました。夫は、夫は殺された事を知らされず。悲しみに沈む妻は、夫の形見の衣装を身に着け、太鼓のせいであらうと、子とともに根みの太鼓を打ち、舞を舞い、衣装を脱ぎ捨てると住吉に帰つて行きます。

14:50 子方水上 嘉
シテ後藤 裕子
富士太鼓

ワキ安田 登
間 山本 則秀

大鼓 佃 良太郎
小鼓 住駒 充彦
八反田智子

後見 水上 優
金森 隆晋

地謡 上野 能寛
金野 泰大
當山 淳司
東川 尚史
大友 孝史
武田 俊樹
朝倉 晋也

〓 休憩 十分 〓

狂言「蟹山伏」(かにやまぶし)
大嶺・葛城(奈良県)で修行を終えた山伏が、供の強力と一緒に故郷の出羽(山形県)羽黒山へ帰る途中、大きな沢に出たところで、急に空模様が変わつてきました。不安になつて先を急ぐ二人の前に、異様な姿の者が現れます。それは蟹の精、傲慢な山伏たちを懲らしめに来たのだと言いました。強力は甲羅を打ち砕いて晩御飯の汁にしてしまおうと、杖を振り上げますが、ハサミで耳を挟まれ動けません。さて、山伏は…。

16:15 蟹山伏

山本 則孝

山本泰太郎
若松 隆

16:30 シテ土屋 鍾 周子
廬

ワキ森 常好
間 山本 則重

大鼓 亀井 広忠
小鼓 岡本はる奈
太鼓 澤田 晃良
栗林 祐輔

後見 内田 芳子
葛野 りさ

地謡 奥家万理奈
武田 伊左
関 直美
内田 朝陽
柏山 聡子
久貫 弘能
石黒 実都
広島榮里子

終演予定 十七時十五分頃

次回 文月能 ご案内	
2019年7月6日(土) 正午始	
鶴 龜	影山 道子
生田敦盛	関 直美
籠太鼓	広島榮里子
熊 坂	内田 芳子
床几之形	

於・宝生能楽堂